ダウン症候群の心理学的研究

4. ダウン症児をもつ親の理解・態度

水　田　善次郎

Psychological studies on children with Down's Syndrome.

4. The Understanding and Attitude of Parents having children with Down's Syndrome.

Zenziro Mizuta

問題および目的

障害児をもつ親は自分が子どもを同一化し子どもの劣弱性がそのまま自分自身の劣弱性という形で認知するために，他人との交わりの中で，不安や焦燥感をもつようになる。そして，親子の関係を歪めていると言われる。そこで，精薄児をもつ親の理解や態度については多くの研究を見ることができる。(1)(2)(3) Levinson, A. は精薄児をもつ親が，それを知った時の衝撃から立ち上がり，その事態にうまく適応していくようになるには，次の7つの段階を経過していくことを指摘している。(4)

① 衝撃：わが子が知恵おくれであることを知った驚き。

② 拒否：精薄という診断を受け入れないで拒否する。

③ 恥辱：精薄児をもったことをはずかしく思う。

④ 自責・葛藤：なんらかの罪による罰であろうと考える。

⑤ 苦痛と嫉妬：たび重なる苦痛と，精薄児をもたない親への嫉妬。

⑥ 過保護と排斥：かわいそうな子だと甘やかし過ぎたり，反対に厄介で迷惑な子だと排斥したりする。

⑦ 適応：精薄児を正しく理解し，その事態をうまく調整し適応することができる。

われわれは，ダウン症児（children with Down's Syndrone）について，その言語や知能や視知覚などについて研究をすすめてきた。そうしたかかわりの中から，親の養育態度が子どもの行動傾向に影響を及ぼしているように思われる点が見受けられた。(5)(6)(7) また，ダウン症児の場合は一般の精薄児に比べ，知恵おくれを知らされる時期が非常に早い。(8)(9) さらに，ダウン症は拒否することのできない独特な顔貌や身体的特徴をもっている。こうした精薄の特殊型であるダウン症児をもつ親の理解や態度は一般の精薄児をもつ親のそれとは異なるのではないかと思われる。

そこで，次の三点を明らかにすることを目的とした。

1)　ダウン症児をもつ親はどんな心の動きを経験しているか。

2)　ダウン症児をもつ親はどのような理解・態度の変化を示すか。

3)　ダウン症児をもつ親は子どもに対してどのようなイメージを抱き，子どもの成長に伴いどのように変化するか。

研　究　方　法

対象者：小鳩会長崎支部の会員の両親とその対照群として某養護学校の両親である。

手続：上記の対象者に次のようなアンケート調査を行なった。

Ⅰ　部

お子さんがダウン症（知恵おくれ）と診断されてから今日に至るまで，次にかかげるような心の動きがあったと思います。どんな心の動きを経験されたか，イ，ロ，ハ…の中から選んで記号に○印をつけて下さい。そして経験した順位を（　）内に番号で記入してください。

（　）イ，ダウン症（知恵おくれ）であるとはっきり言われた時，大きな「ショック」を受けた。

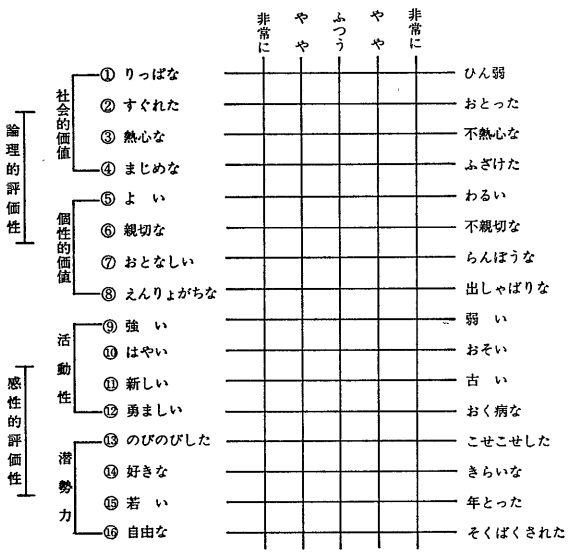
（　）ロ，ダウン症（知恵おくれ）の子をもったことに「はずかしさ」を感じた。

（　）ハ，ダウン症（知恵おくれ）であると診断されたことに「信じたくない気持」をもった。

（　）ニ，正常な子どもだけをもつ親に「うらやましさ」を感じた。

（　）ホ，自分自身への「罪意識」に悩んだ。

（　）ヘ，ダウン症（知恵おくれ）の子どもに対して「かわいがりすぎ」る態度を示した。



（　）ト，毎日どう取りあつかってよいかわからなかった。

（　）チ，ダウン症（知恵おくれ）と言われて「あきらめ」の気持をもった。

（　）リ，この子どもが「もしいなければ」という気持をもった。

（　）ヌ，この子がいることが「生活のはり」を与えてくれる気がした。

Ⅱ　部

Osgood の SD 法による松岡氏の形容詞対尺度分類表を用いてイメージ調査を行なった。[10]

あなたのダウン症（知恵おくれ）のお子さん（氏名を書く）について，どんな感じをもっておられますか，おたずねします。あまり深く考えずに感じたままをお答えください。あなた自身の感じを答えてくださるようにお願いします。（16項目のそれぞれについて○をつけてください。）

結果および考察

(1) 回　収　率

アンケート調査の回収率は対象者により，それぞれ次の通りで，ダウン症児の父親（79％）母親（88％），一般精薄児の父親（69％），母親（72％）である。ダウン症児群（以下ＤＳＧという）の両親の資料の揃っているもの，一般精薄児群（以下ＣＧという）の両親の資料の揃っているもの，および両群の子どもの年令，性別において両群がマッチしているものは，Table. Ⅰ の通りである。

Table Ⅰ　両群の学部別の構成

学　部	幼	小	中	高	計	マッチ
ＤＳＧ	16	15	5	4	40	19
ＣＧ	／	10	13	14	37	19

(2) ダウン症児をもつ親はどんな心の動きを経験しているか。

イ）子どもの成長とアンケートⅠ部の項目に対する反応数との関係

Table Ⅱは，ＤＳＧとＣＧの学部別の反応数の$\overline{X}$とＳＤを示したものである。Table Ⅱ が示すごとく，反応数において，父母の間には両群とも有意な差はみられない。また，ＤＳＧとＣＧとの父親同士，母親同士の間にも，両群の父親，母親のそれぞれの学部別にも有意な差は認められなかった。しかし，両群とも父親より母親の反応数が多く，また，両群とも中間の学部において反応数が減少する傾向がみられた。これらの傾向は子どもへの関心の違いを反映しているように思われる。

Table Ⅱ　学部別の反応数の$\overline{X}$とSD

学部別			幼	小	中	高	計
ＤＳＧ	父	$\overline{X}$	5.1	4.8	5.1		5.0
		SD	2.32	1.47	3.03		2.25
	母	$\overline{X}$	6.4	5.6	6.1		6.0
		SD	2.23	1.74	1.97		2.03
ＣＧ	父	$\overline{X}$	／	4.8	4.1	5.2	4.7
		SD	／	2.93	1.41	1.66	2.07
	母	$\overline{X}$	／	6.4	4.9	5.1	5.4
		SD	／	2.69	1.33	1.79	2.04

ロ）子どもの成長にともなって親の心の動きは変化するか。

Table Ⅲ はダウン症児の成長にともなう両親の理解・態度の変化を示したものである。Table Ⅲ が示すように，「はずかしさ」や「罪意識」の気持は両親ともに，子どもが学校に上がると一時減少し，子どもが卒業する時点にさしかかると，また増加する傾向がみられる。反対に「信じたくない」という気持は子どもが学校生活の途中で最高に達する傾向にある。また，「もしいなければ」という排斥の気持は子どもの成長と共に減少し，反対にこの子がいるために「生活のはり」を感じたという「適応」にも似た気持は増加の傾

Table Ⅲ　ダウン症児の成長にともなう両親の理解・態度の変化

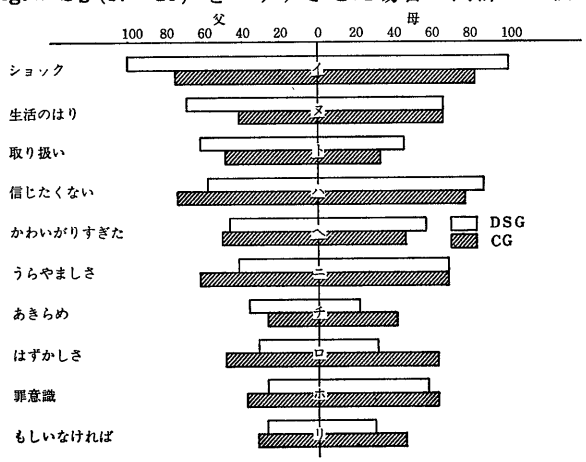
	父					母				
	幼	小	中高	計	χ^2	幼	小	中高	計	χ^2
㋑ショック	87.5	93.3	100.0	92.5		100.0	100.0	100.0	100.0	
㋺はずかしさ	50.0	26.4	44.4	40.0		68.8	20.0	55.6	47.5	幼一小※※
㋩信じたくない	75.0	80.0	44.4	70.0	小一中※	68.8	100.0	77.8	82.5	幼一小※
㋥うらやましさ	56.3	33.3	44.4	45.0		62.5	66.7	77.8	67.5	
㋭罪意識	50.0	6.7	44.4	32.5	幼一小※※ 小一中△	43.8	26.7	66.7	42.5	
㋬かわいがりすぎる	43.8	40.0	44.4	42.5		56.3	46.7	66.7	55.0	
㋣どう取り扱えば	31.3	46.7	66.7	45.0		43.8	46.7	55.6	47.5	
㋠あきらめ	50.0	46.7	33.3	45.0		56.3	26.7	33.1	40.0	
㋡もし，いなければ	37.5	26.7	22.2	30.0		75.0	46.7	11.1	50.0	幼一中※※ 小一中△
㋮生活のはり	25.0	60.0	55.6	45.0	幼一小※	62.5	80.0	66.7	70.0	

向にあると思われる。

ハ）父親より母親が多くの心の動きを経験している。

Table Ⅲ が示すごとく，父親は ㋑「ショック」を受けた，㋩「信じたくない」に70％以上のものが経験しているが，㋭「罪意識」を感じた ㋡「もしいなければ」と思ったというものは30％であり，他の項目に対する経験は40～45％である。一方，母親は ㋑「ショック」を受けた，㋩「信じたくない」，㋮「生活のはり」をもったに70％以上のものが経験し，㋥「うらやましさ」を感じた（68％），㋬「かわいがりすぎた」（55％），㋡「もしいなければ」（50％）である。他の項目に対する経験は40％台である。㋮「生活のはり」をもった，㋥「うらやましさ」を感じたの項目においては母親が父親より有意に多くのものが経験している。また，㋡「もしいなければ」や㋬「かわいがりすぎた」においても母親に経験したものが多い傾向がみられる。つまり，母親は父親より，ダウン症児をもたない親を「嫉妬」し，この子（ダウン症児）に対して可哀そうな子だと不憫がったり，この子さえいなければと排斥したり

Fig. 1 Ss (N＝19) をマッチさせた場合の両群の比較



の右往左往の混乱を経て，この子を「正しく理解」しはじめているといえる。

ニ）ダウン症児をもつ親は一般精薄児をもつ親よりひどい「ショック」を受けている。

Fig. 1 はダウン症児と一般精薄児の年令，性別をマッチさせ，両親の理解のようすを比較したものである。

Fig. 1 によると，ダウン症児の父親は一般精薄児の父親に比べ有意に多くのものが「ショック」を受けている。そして，母親同士においてもその傾向がみられる。また，ダウン症児の母親は一般の精薄児の母親に比べ「はずかしさ」を感じているものが有意に少ない。この傾向は父親同士においてもみられる。さらに，「どう取り扱えばよいのか」の項目において，ダウン症児をもつ両親は一般の精薄児をもつ両親より多くの経験をしている傾向がみられる。つまり，ダウン症児をもつ親の方が一般の精薄児をもつ親よりも不安やあせりを強くもち，それが子どもへの圧力になっているのではないかと思われる。

(3) ダウン症児をもつ親はどのような理解・態度の変化を示すか。

Fig. 2 は両親における父母別の理解・態度の変化を心の動きを経験した流れにしたがって，すなわち，集団移行の傾向性を二次元配置法によって分析したものである。Levinson は前述のように ㋑ショック，㋺拒否，㋥はずかしさ，㋭罪意識，㋬嫉妬，㋣と㋧過保護や排斥，㋯適応の順位を指摘している。が，本研究においては Fig. 2 が示すごとく，先ず，両群の父母とも㋑㋺㋬㋭㋣㋯となり，「拒否」したい気持の次には「嫉妬」心が生まれ，次いで「罪意識」の気持へと変化している。第二に，ＤＳＧの母親においては罪意識の気持が拒否したい気持の次に「嫉妬」心と並行して早く表われている。第三に，ＤＳＧにおいては父母ともに，㋥「はずかしさ」の気持がうすいのに，ＣＧにおいては父母ともに，ショックを受けた次に早く表われている。

Fig. 2 両群における父母別の理解・態度の変化

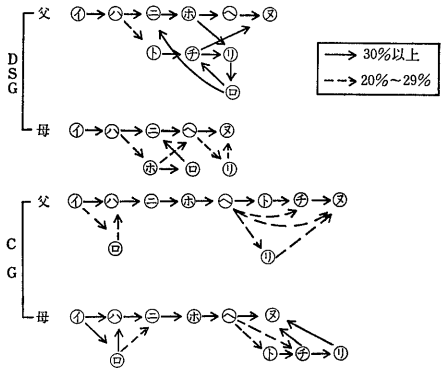
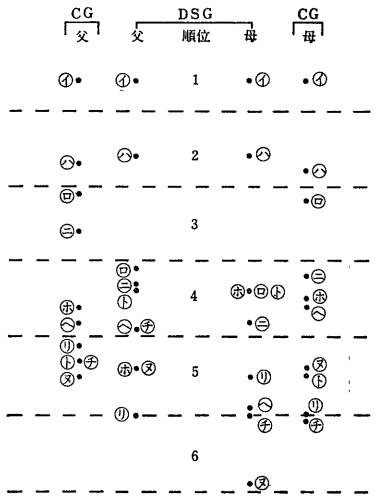


Fig. 3 両群における父母別の理解・態度の順位



また，両群における父母別の理解・態度の順位をウエイトづけて算出して表わしたものが Fig. 3 である。ＤＳＧの場合，１位が㋑，２位が㋺と２位までは順位がはっきりしているが，他は混沌として，はっきりした順位はつけ難い結果になっている。ＣＧの場合，１位が㋑，２位が㋺，３位が㋥と３位まではかなりは

っきりしているが，他は混沌としている。

ＤＳＧとＣＧの違いのもう一つは，㋒子どもを「どう取り扱えばよいか」の疑問がＤＳＧは４位に位置しているのに，ＣＧは５位に位置していることにも，ＤＳＧの親は子どもの取り扱いに強い関心を示していることがみられる。

Table Ⅳ　群別，父母別のイメージ

	父		母	
	ＤＳＧ	ＣＧ	ＤＳＧ	ＣＧ
社会的価値性	3.1	3.3	3.3	3.3
個性的価値性	2.2	2.4	2.3	2.6
活　動　性	3.7	3.7	3.9	3.6
潜　勢　力	2.5	2.5	2.4	2.5

(4)　ダウン症児の親は子どもにどんなイメージを抱いているか。

Table Ⅳ が示すごとく，ダウン症児の親も一般精薄児の親も「個性的価値性」，「潜勢力」において良いイメージをもち，「社会的価値性」，「活動性」において悪いイメージをもっている。父母ともに，ＤＳＧとＣＧの間に有意な差はみられなかった。が，父親の場合，「社会的価値性」と「個性的価値性」において，ダウン症児の父親が良いイメージをもっている傾向がみられる。特にFig. 4 が示すように「熱心な」においては，１％の危険率で「親切な」においては，５％の危険率で，それぞれダウン症児の父親が有意に良いイメージをもっている。母親の場合，「個性的価値性」においてはダウン症児の母親が良いイメージをもち，活動性においては悪いイメージをもっている傾向がみられる。特に Fig. 5 が示すように，「親切な」「おとなしい」においては，１％の危険率でダウン症児の母親が有意に良いイメージをもち，「はやい」においては５％の危険率で一般の精薄児の母親よりも悪いイメージをもっている。

ダウン症児が成長するにつれて，親の子どもへのイメージは変化するのかをとらえたものがTable Ⅴ である。

Table Ⅴ が示すように，両親ともに，「社会的価値性」のイメージが良くなる。特に，母親の場

Fig. 4 父親の群別のイメージの比較

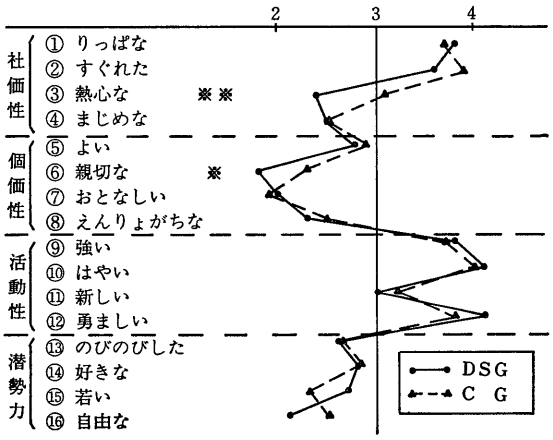
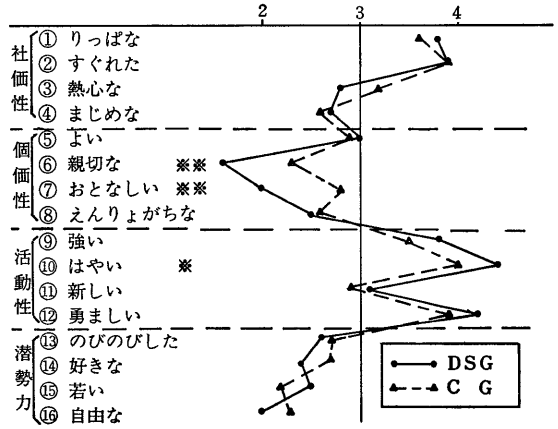


Fig. 5　母親の群別のイメージの比較



合，子どもが中学部，高等部になると幼児や小学部の時より有意に良くなっている。また，ダウン症児は一般に成長にともなって家にひきこもり活動が少なくなるといわれているが，ダウン症児の両親のイメージは子どもが中学部，高等部になると急激に良いイメージの方向に変化している傾向がみられる。

Table V　ダウン症児の成長にともなう両親のイメージの変化

	父			母			
	幼	小	中・高	幼	小	中・高	
社会的価値性	3.2	3.1	2.7	3.5	3.4	2.5	※※
個性的価値性	2.4	2.1	2.2	2.4	2.1	2.4	
活　動　性	3.9	3.8	3.4	3.9	3.9	3.5	
潜　勢　力	2.5	2.5	2.6	2.6	2.3	2.1	

総　括

われわれはダウン症児とのかかわりの中から，彼らは落着きこがなく，注意散慢で他人の話を聞うとしないなどの傾向が強いように思われる。そのような傾性のいくらかはダウン症児に対する親の理解・態度によるのではないかと思われる。そこで，ダウン症児をもつ父親と母親，それぞれ40名，対象群として一般の精薄児をもつ父親と母親，それぞれ37名を対象に，アンケート調査を行なった。それは，親の理解・態度を Levinson の指摘した７段階を参考にした第Ⅰ部とＳＤ法による子どもに対する親のイメージを調べた第Ⅱ部からなっている。

その結果は，

① 父親より母親が多くの心の動きを経験している。つまり，母親が子どもに直接かかわりをもっているために，子どもの理解に混乱をきたしている。が，子どもがいることに父親より「生活のはり」を感じ，父親より，より早く子どもを正しく理解しはじめている。

② ダウン症児の両親は全員ショックを受けているが，一般の精薄児の両親は80％のものがショックを受けている。特に，父親においては，ＤＳＧとＣＧとの間に有意な差が認められた。また，この子をもったことに対する「はずかしさ」においては，ダウン症児をもつ両親より一般の精薄児をもつ両親の方がより多くのものが経験している。特に，母親における両群の差は統計的に有意であった。

さらに，この子を「どう取り扱ったらよいか」という疑問については，ダウン症児をもつ両親が一般の精薄児をもつ両親より，より多くのものが経験している。

③ Levinson は知恵おくれの子をもつ親は，①ショック，②拒否，③はずかしさ，④罪意識，⑤嫉妬，⑥過保護と排斥の段階を経て，⑦適応に至ることを指摘しているが，本研究においては，ダウン症児をもつ両親は，①ショック，②拒否，③嫉妬，④罪意識，⑤過保護と排斥，⑥適応となり，「はずかしさ」の気持は余りなく，「罪意識」より「嫉妬」心が先に経験されている。しかし，心の動きの経験の順位は，３位，４位，５位のところは混沌としていて，はっきり順位づけることは難しいようである。

④　ダウン症児をもつ両親の子どもへのイメージは，個性的価値性と潜勢力に対しては，良いイメージをもち，社会的価値性と活動性に対しては，悪いイメージを抱いている。そして，一般の精薄児の父親より，子どもを熱心で，親切であると思っている。ダウン症児の母親は一般の精薄児の母親より，子どもを親切でおとなしいがおそいと思っている。また，ダウン症児の両親は，子どもが成長するにつれて，子どもの社会的価値性において，良いイメージへと変化しているということを見出した。

⑤　対象者の数が少ないので，今後数を増すことにより，精確を期したいと言う。また，数年後に同一の対象者に同じ質問をして，親の子どもへの理解・態度を検討したいと思う。最後に，御協力いただいた，御両親様や養護学校の先生へ感謝申し上げます。

参　考　文　献

(1)　三木　安正：親の理解について精神薄弱児研究 No. 1. 1956

(2)　Rosen, L. : Selected aspects in the development of the mother's understanding of the mentally retarded child. Amer. J. ment. Defic. 59. 522—525 1955

(3)　Drotar, D. Basklewicz, A. Irvin, B. A., N. Kenne J. Klaus, M. : The adaptation of Parents to the birth of an infant with a congenital malformation. Pediatrics, 56. 710—717. 1975

(4)　Levinson, A : The mentally Retarded child. New York. John Day & Co. 1952.

(5)　水田善次郎：ダウン症候群の心理学的特性 1. 言語について　長崎大学教育学部教育科学研究報告 No.20. 41—52. 1973.

(6)　水田善次郎：ダウン症候群の心理学的特性 2. 知能特性について　長崎大学教育学部教育科学研究報告 No.22. 57—62. 1975

(7)　水田善次郎：ダウン症候群の心理学的特性 3. 視知覚特性について　長崎大学教育学部教育科学研究報告 No.23. 57—67. 1976

(8)　塩野寛，門脇純一：Down 症候群児をもつ母親へのアンケート調査，小児科 18. 2. 153—156. 1977

(9)　小林勇：ダウン症候群児をもつ親へのアンケート—はじめて診断を告げられたとき—　第24回日本小児保健学会 1977

(10)　松岡重博：S.D.法による意味構造の因子論的研究 —特に人物認知について—　長崎大学教育学部教育科学研究報告 No.13. 17—38. 1966

（昭和52年10月31日受理）